

2026 年 1 月 18 日 降誕節第4主日礼拝メッセージ

「あなたを呼ぶ神の声」

牛田匡牧師

聖書 エレミヤ書 1章 4-19節

今回の聖書のお話は、ヘブライ語聖書の中から、預言者エレミヤのお話でした。エレミヤは紀元前 7 世紀から 6 世紀にかけて活動した預言者です。その時代、古代イスラエル王国は、南北2つに分かれ、それぞれアッシリアの属国になっていましたが、エレミヤが登場するおよそ 100 年前に、北王国イスラエルは、隣国エジプトを頼ったことから、アッシリアによって滅ぼされてしまいました。その後、アッシリアに代わってバビロニアが勢力を伸ばして来て、エジプトや南王国ユダへと迫って来ました。そのような時代の大きな変化の狭間で、強大な軍事力を持つ大国に囲まれながら、自分たちの国はどうすればよいのか、どこに行けば生き残ることが出来るのか、と人々は右往左往していました。そのような時代の中で、エレミヤは生まれ、そして預言者としての歩みを始めることになりました。

「預言者」というのは、「神の言葉」、いわゆる「ご神託」を人々に告げる存在ですが、その「預言者（ナービー）」というヘブライ語の単語の語源は、「（神によって）呼ばれた者」「（神の）代弁者」を意味すると考えられています。そして、今回の「エレミヤ書」1 章は、よく「エレミヤの召命物語」と呼ばれていますが、彼がどのようにして主なる神、命の神ヤハウエによって、選出され、呼び出されたかが詳しく書いてありました。

1 章 1 節によると、エレミヤはエルサレムから北東へ 5 キロほど離れた所にあるアナト村の祭司の息子であったそうですが、ある日、突然、命の神の言葉がエレミヤに臨みました。「私はあなたを（母の）胎内に形づくる前から知っていた。母の胎より生まれ出る前にあなたを聖別していた。諸国民の預言者としたのだ」（5）。いきなり、こんな言葉を聞かされたら、誰でも驚くでしょう。彼も、困惑しました。6 節です「ああ、わが主なる神よ／私はまだ若く／どう語ればよいのか分かりません」、だからそんな大層なお役目など、とてもではありませんが、果たすことができません、というわけです。しかし、神は一向に折れません。「『まだ若い』と言ってはならない。／むしろ、私があなたを遣わす相手が誰であろうと／赴いて、命じることをすべて語れ。彼らを恐れてはならない。／この私があなたと共にいて、救い出すからだ」（7-8）。

さらに、神はその御手を伸ばし、エレミヤの口に触れ、「さあ、私はあなたの口に私の言葉を授けた。見よ、今日、私はあなたを／諸国民、諸王国の上に任命する。引き抜き、壊し、滅ぼし、破壊し／あるいは建て、植えるために」と言われました(9-10)。そして、それ以降、エレミヤは南王国ユダの人々と、南王国に難民としてやって来ていた北王国出身の人々とは対して、このままでは滅ぼされてしまう、破壊されてしまう、と耳の痛いことを告げ知らせ、そして命の神の御心に立ち返るように、立ち返って命を得るようにと預言し続けていくことになりました。

その時、エレミヤは自身のことを「若者に過ぎない」(6)と言っています。現代の日本語では、自分のことを謙遜して「若輩者ですが、よろしくお願いします」などと言ったりしますが、ヘブライ語の意味する所では、「結婚前の男性」という意味です。ですから、成人式と結婚とがあまり離れていなかった時代ということを考えると、恐らく 10 代だったでしょうか。そのような若者が、いきなり神様から「私はあなたを(母の)胎内に形づくる前から知っていた。母の胎より生まれ出る前にあなたを聖別していた。(あなたを)諸国民の預言者としたのだ」(5)と言われたら、誰だって驚いて尻込みしてしまうのではないかと思います。しかし、神は「恐れるな。／私があなたと共にいて、救い出す」(8)と言われました。

ここから、エレミヤの預言者としての活動が始まりました。11 節にある「何が見えるか」「アーモンドの枝が見えます」は、注釈にもあるようにヘブライ語で「シャケド」と 12 節の「シェケド」が語呂合わせになっているという言葉遊びもありますが、パレスチナの地方では冬の終わりに他の植物に先立って眠りから目を覚まし、最も早く花を咲かせるのがアーモンドの木だそうで、そこから「目覚めの木」という意味があるのだそうです。日本で言えば、まだ雪の残るような 2 月や 3 月に一足先に花を咲かせる梅の木のようなものでしょうか。周囲の人々に先立って、真実に目覚めて、神の言葉を告げ知らせる役目を与えられたエレミヤ自身を象徴しているかのようです。

その他、13 節にある「北の方から来る煮えたぎる鍋」などの幻は、北方から迫り来る敵国の脅威を表していますが、これはエレミヤが感じ取っていたよりもずっと遅く、なかなか到来しませんでした。そのようなわけですから、彼は緊迫感をもって周囲の人々に預言の言葉を伝えるものの、すんなりと聞き入れてもらえることはなく、人々から笑われたり、馬鹿にされたりして、ちっとも報われませんでした。20 章には神に対する不平が記されています。「私は一日中笑い物となり／皆が私を嘲

ります」(7)、さらに自分が生まれたことすら「呪われよ、私の生まれた日は。母が私を産んだ日は祝福されてはならない」(14)と言って呪い、「なぜ、私は胎から出て、労苦と悲しみに遭い／生涯を恥の中に終えなければならないのか」(18)と嘆いているほどです。

神の命じられるままに、その御心に従って歩んだ末、エレミヤはどうなったのかは、聖書には記されていませんが、ユダヤ教の伝承では彼はエジプトで石打ちの刑に処せられて殺害されたのだそうです。それ程までに報われなかったエレミヤは、どうして預言を止めなかったのでしょうか。それもまた神の故でした。同じく 20 章には次のようにも記されています。

⁹ 私が、「もう主を思い起こさない／その名によって語らない」と思っても／主の言葉は私の心の中／骨の中に閉じ込められて／燃える火のようになります。／押さえつけるのに私は疲れ果てました。／私は耐えられません。

¹¹ 主は、恐るべき勇士のように／私と共におられます。／それゆえ、私を迫害する者はつまずき／私にまさることができません。

彼は自分の損得、自分の思いとしては、預言などしたくなかった。「もう語らない」、迫害もされたくないし、命も狙われたくない。しかし、神の言葉は自分の中で、燃える火のようになって、抑え込み、閉じ込めておくことができないので、語らずにはいられないと言うのです。「分かってはいるけれども、止められない」というような状態でしょうか。そのような生涯は、困難も多く、敵も多く、目に見える富も名声も何も得たものが無かった。それこそ一見したところ、「神から見放された人生」であるかのように見えてしまうかもしれません。しかし、神が共にいて、生涯ずっと共に歩まれていた人生だったのであれば、それこそが祝福された人生だったと言えるのではないのでしょうか。

さて、ひるがえって見て、現代を生かされている私たちはどうでしょうか。多くの方は、エレミヤが聞いたような明確な神の呼びかけを聞いたことはないかと思います。しかし、聖書が繰り返し述べているように、私たちが命を与えられて、今日を生かされていると言うことは、この命の創り主がおられて、その命の創造者である神が、私たち一人ひとりの名を呼び、贖い、いつも共にいてくださっている(イザヤ 43:1-2) からに他ならない、ということではないかと思います。神様がいつも一緒にいてくださる。だから、きっと大丈夫……。

私たちは未来を予知することはできませんから、これから先も、困難に遭うことが

一切なくなるということはないでしょう。また、「今はこれが最善の道だ」と思っても、後になってみると「別の道の方が良かった」と後悔することもあるかもしれません。たとえ、光が全く見えなくて、真っ暗闇だという時があっても、大嵐に見舞われる時があっても、それでも改めて振り返ってみた時には、紛れもなく神様が共に歩いてくださったと思えるような歩み。そのような生涯が、全ての人には用意されているのではないのでしょうか。

「神の言葉を聞くのは、エレミヤのような特別な預言者だけだ」と言われる方もいるかもしれません。しかし、「神の言葉」とは、聖書に書かれている文字の事ではありません。命の神が歴史の中に確かに働き、そして起こって来た数々の出来事、それが神の言葉であり、現代でも日々起こっている出来事が、紛れもない神の言葉です。「預言」とは、人に向かって話されるものであり、人を作り上げ、励まし、奮い立たせる言葉のことです(1コリント 14:3)。冷静な頭で社会を認識して、現状を分析して行動すること。正しいことを正しいと言い、誤ったことを誤ったと言うこと、そのように仲間たちと連帯して歩むこと。それが預言の言葉であり、クリスマスに人間となったイエス・キリストが、その言葉と行動をもって示したことでした。

私たちもまた一人の人として、かけがえのない命を与えられている一人、神様から名前を呼ばれている一人として、日々に目の前に与えられたなすべきことを、なしていくことができるように、共におられる神様によって力づけられ、押し出されて参ります。